

た事例については、集団発生例、散发例を含めて、ほとんどわかっていない。しかし一方、米国においては、1982～1995年の間に原因が判明した症例の52%が畜牛由来であると報告されている。畜牛が腸管出血性大腸菌の保菌動物であることがわかっていて、わが国でも市販牛肉や輸入牛肉、あるいは畜牛から腸管出血性大腸菌が分離されたという報告がある。人から人への感染も報告されている。

予防ワクチンの開発研究も行われているが、実用化には至っていない。

〔教育講演〕

ぶどう膜炎の背景因子

(眼科学)

小暮美津子

ぶどう膜炎はぶどう膜（虹彩，毛様体，脈絡膜）におきた炎症性疾患の総称であるが，炎症はしばしばこれに隣接する強膜や網膜，硝子体にも波及し，これと

は逆に角膜，強膜，網膜などの炎症がぶどう膜に及ぶこともある。広い意味では，これらも含めてぶどう膜炎と呼称される。

ぶどう膜炎は発症の経路から外因性と内因性に分けられる。前者は外的要因によって起るものであるが，後者は全身的要素，中でも免疫異常の介入が多く，中にはぶどう膜炎の発症を契機として，その背景にある重大な全身病の早期発見につながることもある。

日本において出現頻度の高い三大ぶどう膜炎としてはペーチェット病，サルコイドーシス，原田病が挙げられる。これらはすべて全身性疾患である。ほかにも，強直性脊椎炎，ライター病など HLA-B27 抗原に関連して起る疾患，若年関節リウマチ，炎症性腸疾患，間質性腎炎などに合併してぶどう膜炎が起る。

今回はぶどう膜炎のうち，全身疾患を伴うものを挙げ，その主なものについて解説する。